

隠れキリシタン殉教地

東北の登米市の静かな森林には、悲劇的な過去があります。この場所は「海無沢三経塚」

（Kainashizawa Sankyōzuka）と呼ばれ、ここで 120 人の隠れキリシタン（Kakure Kirishitan）が、享保時代（1716 年–1736 年）に拷問され、十字架にかけられ槍で突かれ、あるいは首をはねられました。隠れキリシタンたちは、1623 年に徳川幕府がキリスト教を禁止し、死刑にする法律を施行して以来、密かに信仰を守り続けた人々でした。

キリスト教はこの地域において、16 世紀後半に鉄製造技術の発展とともに広まりました。当時、最も進んだ鉄の製造方法はヨーロッパの技術を使用しており、備中（現在の岡山県）から 2 人の専門家が招かれ、地元の村の鉄作りに技術を教えました。これらの専門家はキリスト教徒の兄弟、千松大八郎（Senmatsu Daihachirō）と小八郎（Kohachirō）で、彼らは鉄作りの技術だけでなく、信仰も村人たちに伝えました。結果として、信仰は広まり、いくつかの村では住民全体が一斉にキリスト教に改宗しました。

仙台藩を治めていた強力な大名、伊達政宗（1567 年–1636 年）は、初めキリスト教に対して寛容でした。しかし、幕府がキリスト教を禁止した後、政治的な理由から政宗は仙台におけるキリスト教徒への迫害を許可しました。それにもかかわらず、多くのキリスト教徒たちは秘密裏に信仰を続け、何世代にもわたって信仰を守り続けました。しかし、時が経つにつれ、その代償は変わることなく厳しくなり、信者たちは発覚した際には信仰を捨てることなく殉教の道を

選びました。

海無沢三経塚の殉教地には、キリシタンたちが拷問され、処刑された場所を示す数個の石があります。この辺鄙な場所は、亡くなった者たちの叫び声が他の村人に聞こえないように選ばれました。さらに丘を少し登ると、「瞑想の丘（Meisō no Oka）」と呼ばれる小さな平地があり、そこで犠牲者たちは処刑の命令を待っていました。丘の頂上には約 40 人の犠牲者が松の木の下に埋葬された場所を示す塚があり、そこには目立つ石の十字架が唯一の装飾となっています。その他の犠牲者は「朴ノ沢」や「老ノ沢」と呼ばれる近くの場所に埋葬されていますが、こ

こが唯一手つかずのまま残された墓地です。

この場所の悲劇的な過去は、200 年以上経った 1954 年に発見された文書に記載されていなければ、完全に忘れ去られていたでしょう。この場所が発見されて以来、海無沢三経塚は、外国からの訪問者も含めたキリスト教徒の巡礼地となっています。近くの米川カトリック教会は、集団墓地近くで毎年記念の屋外ミサを行い、今日ではこの地は静かな思い出と信仰の場となっています。